

湖北省における漢川善書の活動現状の調査報告

～漢川善書の中国民間文化遺産としての保護の提唱～

林宇萍・阿部泰記

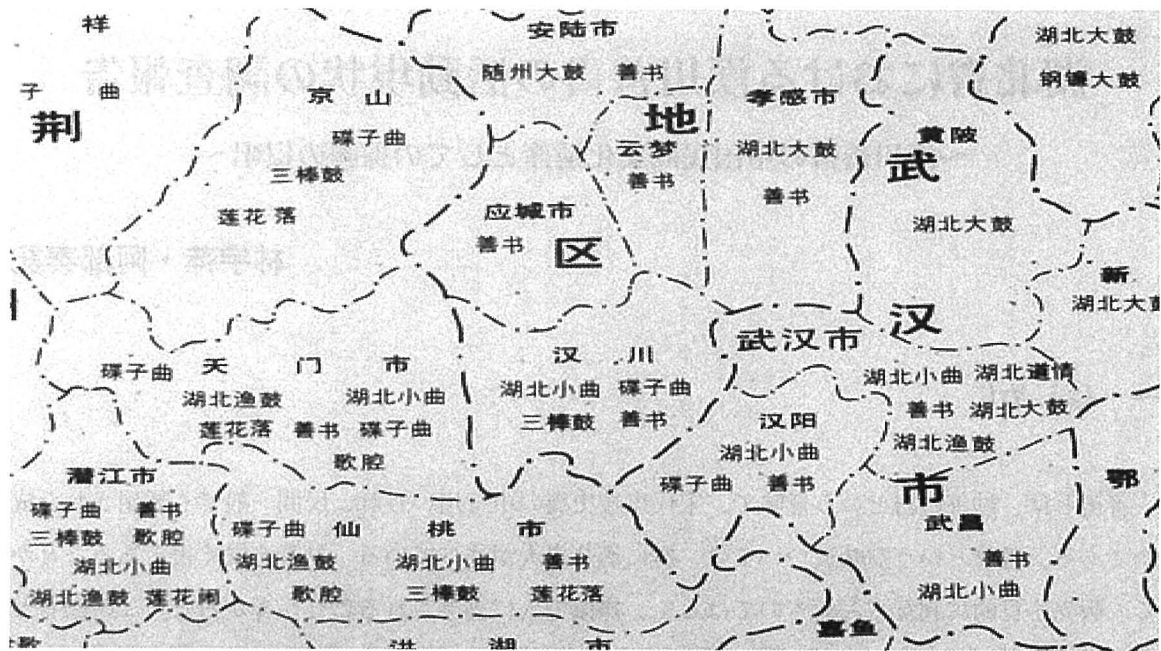
一 はじめに

善書とは、勸善の書という意味で、宋代以後史籍の中で用いられ、民間一般でも通用された成語である。善書という意味については、概に酒井忠夫が述べている。勸善を説く書であることから、販売を目的に刊行されたものではなく、無償で人に施与されることが多かった。この勸善とは儒教經典の中で説かれる道德の実践を勧めるのではなく、民衆にも受け入れられる民衆道德の実践を勧めるという意味である。南宋の真徳秀の「感応篇序」は、宋学者の善書論として最初の論文である。儒家の経書は「学者」に教えるもので凡民に語るものではないと言われ、善書感応篇は「道家傲世書」であり、「警愚覚迷」の書であると述べている。

清代に至って政府は「聖諭宣講」を奨励したが、実際の宣講では民衆への浸透を目的として案証という説話が取り入れられ、『宣講集要』に続いて各地の善堂（慈善団体）によって陸続と編集刊行された。湖北省漢川市の宣講は民国初年に善書のメロディを創出し、娯楽性を帯びて主に湖北省の漢川で盛んとなり、「漢川善書」として名を馳せた。

こうした宣講文芸は現代に至るまで非職業人や職業芸人によって継承されてきた。『中国曲芸音楽集成』湖北卷(1992)の「湖北音楽曲種分布図」によると、善書活動が行われた地域は、漢川をはじめ、仙桃、天門、潜江、応城、安陸、雲夢、孝感、漢陽、武漢、武昌であった。なお2002年の阿部泰記の現地調査結果によれば、四川・湖南では宣講文芸はすでに滅亡したという。筆者の調査では現在、漢川市と仙桃市に現存する。

本論文では、筆者が2004年8月から2005年2月にかけて湖北省漢川市周辺地方を調査した結果を報告し、全国でこの地方にしか残らない伝統的な漢川善書を中国民間文化遺産として保護を提唱することを目的とする。



『中国曲艺音楽集成』湖北卷上「湖北省音楽曲種分布図」(1992年11月、新華出版社)

【先行研究】

善書に関する研究の、日本で最も早いものは前筑波大学名誉教授酒井忠夫『中国善書の研究』(1960)である。著書は明代の庶民教化、宗教における善書を紹介した。

中国大陸では、早期の鄭振鐸『中国俗文学史』と胡世瑩『彈詞宝卷書目』には、説唱性宝卷として善書を収録した。蒋守文は「四川善書源流辨」「从善書の衰亡吸取教訓」「四川善書与川劇」において四川に流传した曲芸善書を整理し、四川善書の曲目、唱腔と内容の特徴を紹介した。劉守華「口頭文学与民間文化—論善書」(1989)には、中国民間故事において重要なジャンルであると説いている。

台湾の陳兆南『宣講及其唱本研究』(1992)は、明代、清代の宣講活動の特徴、宣講唱本の内容の特徴などを紹介した。

近年出版された『中国曲艺音楽集成』湖北卷(1992、新華出版社)や『中国戯曲志』湖北卷(1993、文化芸術出版社)は民間芸能として漢川善書を紹介し、近代上演された曲目、芸能人、活動地域、時期なども記録している。

游子安は、香港城市大学での博士論文『勸化金箴・清代善書研究』(1999)において、酒井忠夫『中国善書の研究』に基づき、多くの清代善書の原資料を収録した。

陳霞の博士論文『道教勸善書研究』(1999)は、中国道教の思想的観点から、勸善書の形成、盛行、道教勸善書の内容と倫理特徴を述べている。

阿部泰記は「宣講の伝統とその変容」(2003)で、宣講に於ける案証(形式と文体、因果応報と勸善懲惡)、宣講の流行と宣講の変容を述べ、また現地調査を行い、娯楽と教育の意義を持つ

芸能化した漢川善書を紹介した。「宣講における歌唱表現—二重の案証効果」(2004)では宣講の歌唱、演劇の歌唱、語り物の歌唱、詩歌と物語を分類して、宣講における歌唱の特徴を分析している。

二 漢川善書の活動の調査

2002年、中国民間文芸家協会が「中国民間文化遺産を救う工程」(以下「工程」という)をテーマにして研究会を行った。そこでは作家馮驥才教授が、中国の現代化につれて農耕文明はますます衰えていると指摘し、文化の角度から見ると、中国民間文化遺産である民間説唱、民間故事、切り紙、農民画などは伝承する人が少なくなる一方であり、現代文明社会に至って、農耕文化は博物館で保護する必要があると訴えている。

筆者はこの「工程」を機に、湖北省に今もなお行われている説唱曲芸「漢川善書」の活動を考察し、漢川市政府の主催で開催された漢川善書を中華文化財の一つとして提唱する研究会に参加した。参加メンバーは山口大学大学院東アジア研究科教授阿部泰記、同研究科学生林宇萍、漢川市政治協商委員会主席李顕昌、漢川市文化館館長魏文明、湖北省民間文学研究会王老黒、華中師範大学文学院教授劉守華、華中農業大学文法学院教授彭光芒、講師余霞、漢川市第一高等学校校長胡新国、余書記等であった。

漢川市における漢川善書の研究会

- 漢川市政治協商委員会を始め、山口大学東アジア研究科、華中師範大学文学院、華中農業大学文法学院、漢川市文化館、漢川市第一高校などが参加した漢川善書をめぐる研究会
- 時間：
2004年9月
2—10日
- 場所：
漢川市政治協商委員会
漢川市文化館
漢川市第一高校



漢川市第一高校において 左から阿部泰記、李顯昌、劉守華諸氏 [林宇萍撮影]

研究会における討論内容を整理すると以下のようになる。

1) 漢川善書の由来、変容

善書の形成は宋代中期の封建社会にあって、政権が揺れ、戦争は相継ぎ、民間の生計が不安な時代を背景としている。統制者は庶民の統制を強化し、兵権・財権・政権を集中し、地方から中央まで文人を大量に起用し、思想制限も強化していた。善書は、民間では「因果書」と云う。『太上感應篇』の出現は善書形成の起点である。宋代では『玉曆鈔伝』、金代では『太微仙君功過格』、元代では『文昌君陰騭文』が善書の代表作であった。漢川善書は教化の目的で、民間説唱曲芸の形で湖北省各地に流行した。

2) 漢川善書の文体、内容と説唱の特徴の変化

内容は通俗的で、おおむね因果応報、親孝行の話が多い；言語は俚言を用い、西南方言で口頭語が多い；文体は明太祖（洪武三十年）の四言体『教民榜文・六諭』「孝顺父母、尊敬長上、和睦鄉里、教訓子弟、各安生理、毋作非為」；清代の七言体『聖諭廣訓』「敦孝悌以重人倫、篤宗族以昭雍睦、和鄉党以息争訟、重農桑以足衣食・・・」；現代の徐忠徳創作の十言体『李三娘』「走上前跪塵埃汗如雨点、駭得我劉志遠魂魄飛天、」「尊父親請息怒容儿告稟、為儿的跪父前細説原因、儿昨晚花園楼灯前綉錦、耳听得楼外面像有風声・・・」というように、白話に近い韻文に変容していく。

3) 漢川善書の活動地域、時間

漢川市第一高級中学校では『漢川的歴史与文化』(2004年4月)を編纂して教材として使用しており、その第4章十二「漢川善書与其伝承者」には、馬口鎮の王海元、東門城外の陳宗福(1894年-1972年)、歡樂街の潘炳学(1900年-1976年)を紹介している。現在では、漢川善書の上演は漢川市馬口鎮、漢川市城関区で毎日午後行われている。メンバーはこれらの地区での上演の一部を参観した。

4) 漢川善書の庶民教育意義と老人観客の娯楽性

漢川善書は清朝の民衆教化の方針を継承して、道德教育を趣旨とした文芸活動であり、主として老人の娯楽に供されている。この善書は価値ある民間文学であり、純粹素朴な特徴を持っている。

5) 漢川善書の生き残る条件

ほかの民間文芸と同様に、政府の注目、メディアの宣伝が必要である。たとえば今度の研究会の開催が、以下のように、新聞『湖北日報』のホームページに掲載されたのは、漢川市政治協商委員会が漢川善書を重視しようとする意志の反映である。

“漢川善書”引起中外学者关注

<http://news.tom.com> 2004年10月12日08
時17分 来源:荆楚在线—湖北日报

- 荆楚网消息(湖北日报)通讯员刘重庆、罗国雄报道:
近日,省民间文化研究中心主任刘守华和日本同山口大学教授阿部泰记等中外学者来到汉川,寻访民间艺人,考察研究“汉川善书”。“善书”旨在劝人向善,是一种韵散相间、讲唱结合的曲种,源于唐代的“变文”和“俗讲”。近百年来,南方“善书”逐步消亡,唯独汉川、蔡甸、仙桃一带的艺人还在继承和发展这个曲种,目前逐步形成了以汉川为中心的“汉川善书”。“汉川善书”现存优秀名篇300多篇

1. 漢川善書の調査結果

漢川市においては、市内城関区西門橋の徐忠徳グループ、郊外馬口鎮電影院の袁大昌グループが存在し、経営者が演芸館を開いて毎日公演していることを確認した。上演は毎日正午に開始し、十六時頃まで行われている。老人は現代社会をテーマとしたテレビドラマを鑑賞することはできず、こうした伝統的な家庭道德をテーマとした物語を老後の大きな楽しみとしている。1元（1元は約13円）出せば4時間ぐらいの上演を観ることができ、観客は毎日30人程度だという。

漢川善書の活動グループ現況

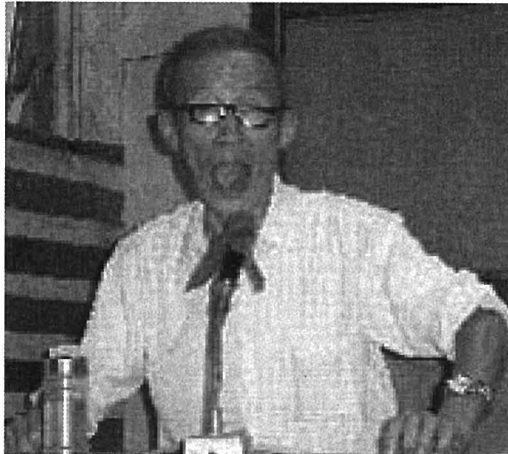
①漢川市城関区西門橋

除忠徳(男、70才、漢川出身、善書テキストの作者)のグループ
 熊紹軒(男、62才、漢川出身)
 聶海子(男、58才、漢川出身)
 黄春桃(女、55才、漢川出身)
 祁敏新(女、49才、漢川出身)
 経営者:魏愛云(女、62才、経営歴4年)

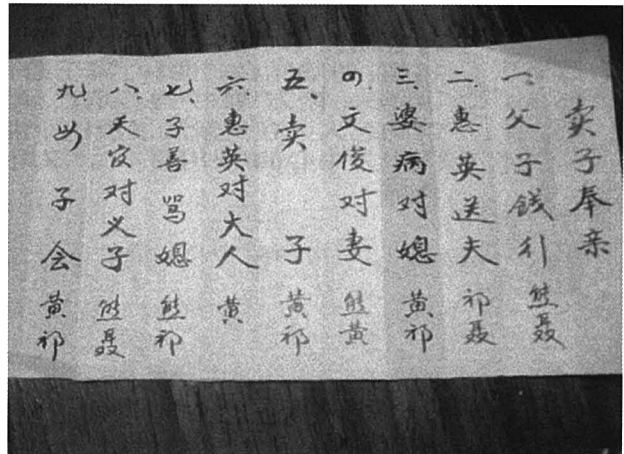
②漢川市馬口鎮電影院

袁大昌(男、77才、蔡甸区出身、善書テキストの作者)
 許国平(男、59才、馬口鎮出身、善書テキストを書く経験がある)のグループ
 王愛知(女、56才、邱子腦出身)
 何早娥(女、46才、南河北区出身)
 王慧芳(女、46才、分水鎮出身)
 経営者:女、電影院を經營、定年退職した。経営歴8年

①漢川市城関区西門橋における善書の上演



徐忠徳氏のグループによる『賣子奉親』の上演



『賣子奉親』対詞の役割分担表



対詞を唱う黄春桃氏(左)と祁敏新氏



熊紹軒氏(左)と聶海子氏

[阿部泰記撮影]

2004年9月2日12時から、「徐老書館」において徐忠徳氏のグループが『賣子奉親』を上演した。リーダーの徐徳忠によってストーリーが語られ、その進行の過程で登場した人物が「対詞」を唱う。ストーリーは徐氏の脳裏に記憶されていて、テキストは存在せず、登場人物の唱う「対詞」のテキストのみが存在する。いまその「対詞」のテキストによってストーリーをまとめると以下のごとくである。

1場 父子饑行（熊・聶）—父周子善は科挙受験に上京する子文俊を見送る。文俊は十六歳で秀才に合格し、妻梁恵英を娶り、一子妙郎をもうけていた。文進〔俊〕は、アクセサリーを売って旅費を作ってくれた妻恵英に感謝し、子善に対して科挙に合格して清官になることを誓う。

2場 恵英送夫（祁・聶）—恵英は夫を送別するに臨んで、夫に両親の信頼に応えて努力するよう励ます。文俊は妻が旅費を工面してくれたことに感謝し、決して妻を裏切ることはないことを誓う。

3場 婆病対媳（黄・祁）—母呉氏は文俊が三年経っても帰宅しないため病気になり、飢饉を生き延びるため、不肖の子文俊を忘れて妙郎を連れて再婚するよう促す。恵英は文俊を信じていること、病母の世話をしなければならないことを告げ、飢饉を乗り切って夫の帰りを待ちましようかと姑を励ます。

4場 文俊対妻（熊・黄）—文俊は恩師の婿となるが、故郷の家族を思って、既婚であることを妻張愛嬌に打ち明ける。愛嬌は大いに怒り、前妻を離縁しない限り一緒に暮らさないと宣告し、離縁状を書かせる。

5場 売子（祁・黄）—恵英は七歳の妙郎に向かって、太原が飢饉になり祖母が病死し、祖父も病気になったため、お前を売るしかないと告白する。妙郎は母に自分を売らず、父の帰りを待つよう懇願する。恵英は衆人の前で妙郎を買ってくれるよう訴える。

6場 恵英対大人（黄）—恵英は天官（吏部尚書）に向かって、病気の祖父を救うために我が子売る事情を語り、養子にすると聞いて感謝する。

7場 子善罵媳（熊・祁）—子善は孫妙郎を売った嫁恵英を罵り、孫を連れ戻すよう迫り、打とうとする。恵英は文俊が御史を授かりながら変心したこと、送って来たのは書信ではなく離縁状だったことを告げる。子善は恵英にあやまり、不肖の子文俊を罵る。

8場 天官対義子（熊・聶）—天官は状元に及第した養子妙郎に向かって、太原に帰郷して実母に会うよう命令し、拒絶する妙郎を不孝者だと叱って打とうとする。妙郎は養父に向かって、実母を認めては恩知らずだと思われると思ったと弁明する。

9場 母子会（黄・祁）—妙郎は母に再会し、状元に及第して養父の命により帰郷したこと、母に誥命を授かるよう朝廷に上奏すること、途中で出会った乞食を下僕として雇って欲しいことを告げる。恵英は妙郎に過去の経緯を語り、我が子が出世して帰郷したことを喜ぶ。

このテキストは完結していない。おそらく結末は不孝者の周文俊が裁きを受けることになるのであろう。親孝行の倫理を説くことは民衆教化の基礎であり、清朝の聖諭でも第一に挙げているし、孝をテーマにした物語は『琵琶記』『秦香蓮』をはじめとして民間に多く存在し、この物語にもその影響が見受けられる。

この善書ではまた民衆への浸透を目的とするため、以下のように武漢の方言である西南官話を使用している。

若昧心、我日後、死無下梢（偽りならば、すぐに死に、よい結末はないだろう。）

〔2. 惠英送夫〕

把妙郎、帶出姓、撫養成人。（妙郎連れて、再婚し、立派な人に育てなさい。）

〔3. 婆病対媳〕

冇算到、我的兒、還能回来。（思わぬことに、我が息子、再び家に帰るとは。）

〔9. 母子会〕

②漢川市馬口鎮電影院における善書の上演



袁大昌氏のグループによる『打碗記』の上演

〔阿部泰記撮影〕

2004年9月2日15時から馬口鎮において袁大昌氏のグループが、袁大昌氏が創作した『打碗記』を上演した。この日は研究会の参観があるということで、特別に馬口鎮中学で上演されたが、翌日は平常どおり電影院を会場としていた。許国平氏（左）がストーリーを語り、袁大昌氏（中）たちが対詞を唱う。テキストによってストーリーを要約すると、以下のごとくである。

失明した七十二歳の老婆周元芝は“瞎婆”と呼ばれ、沙市便河街橋東に住んでいる長男陳大年（妻孫如意）、橋西に住んでいる次男陳小寒（妻李艷艷）と生活している。“瞎婆”は大年の

家に一ヶ月、小寒の家に一ヶ月と交替して暮らしている。大年と小寒は“恐妻家”であり、日常生活のこと全部を自分の妻に任せている。彼らの妻孫如意と李艶艶は不孝者であり、“瞎婆”を虐待し、劣悪で割れそうなお碗に饅えたご飯など粗末な食物を食べさせていた。その年の2月28日に大年の息子陳進が新婚の妻白玲を駅に出迎えに出かけると、如意は“瞎婆”を邪魔者扱いし、朝から“瞎婆”を追い出した。豪風大雪の中で“瞎婆”は橋を渡って次男の小寒の家へ行くが、艶艶はまだ1時頃なので、長男の家であと一食せよと言って“瞎婆”を受け入れず、ドアを開けない。“瞎婆”は自分が年をとり、目が見えず、子供らが自分を人間として扱ってくれないため生き続ける楽しみを失い、橋を渡る気持ちをなくして、河に身を投じて命を落とそうと思うが、幸い白玲によって命を救われる。“瞎婆”は橋東の家に庇護されて、如意の母(李育英)に苦衷を語る。かくて白玲と李育英は親孝行の道理を大年、如意、小寒、艶艶に説いて聴かせる。大年夫婦と小寒夫婦は後悔して“瞎婆”の専用粗碗を打ち壊し、以後は“瞎婆”を大切にすることを誓って、物語は円満に終結する。

この案証は、母を敬愛しない息子とその嫁を写實的に描写している。このように兄弟が輪番で親を養うことは習慣的であつたらしく、『宣講集要』にも悪習として批判的に記述されている。“瞎婆”が汚いお碗を持って彷徨して泣く場面では、観客たちはみな涙していた。

③仙桃市老城区夕陽紅俱樂部における善書の上演

仙桃市における善書の活動

仙桃市老城区夕陽紅俱樂部
老年之家

鍾立炎(男、72才、仙桃市出身、
《双合印》などの作者)

尹業謨(男、68才、仙桃市出身、
《鉄樹開花》などの作者)

杜子甫(男、77才、仙桃市出身、
《三子争父》などの作者)

王宗堯(男、70才、仙桃市出身)



漢川市における研究会が終了して幾日か経過した9月8日のこと、筆者は仙桃市に善書を上演するグループが存在するという情報を得て、仙桃市の調査に赴いた。

仙桃市のグループは漢川市のグループのように常時上演することはなく、招かれることがあれば協力して上演する程度だという。

この地域における宣講は開始する前に焼香して天地を祀る。これは漢川市にもない伝統的な儀式である。宣講は民衆に浸透するために信仰との結合がなされていた。これは酒井忠夫氏が指摘したように、宋代以来の伝統的な教化の形態である。それゆえ過去の案証には往々にして竈神や関羽などの神明が出現し、ストーリーにも因果応報、勧善懲悪の構想がなされていたのである。だが現在では社会の変化に即応して、神明の存在を強調することはなくなり、儀式として痕跡を留めるに至っている。



鍾立炎氏のグループによる『双合印』の上演 上演に先立って焼香が行われた [阿部泰記撮影]

仙桃市老城区夕陽紅クラブ老年之家において鍾立炎グループが上演した『父子双合印』について、テキストに沿ってそのストーリーを要約すると、以下のようになる。

宋の真宗年間、浙江省郊外の秦家荘に秦百万という四品官吏がおり、その妻康氏、長子国保とその妻李秀英、次子国正とその妻黄四秀の六人で暮らしていた。国保は上京して科挙を受験し、状元に及第して八府巡按に任命され、金印・宝剣を賜って水路南京に向かう。途中秦家嶺に立ち寄ると、姑康氏は妊娠中の秀英に護身用として家宝の白羅衫を贈る。夫婦は黒水港を通過して五霸山の山賊鄂成虎に襲われ、国保は水中に身を投げて、漁民万里爽に救われる。秀英は鄂にさらわれるが、鄂の義弟羅成に救われ、白雲廟に逃れて男児を出産する。秀英は嬰兒を白羅衫に包み、「血書」をつけて捨てる。嬰兒は鄂の義弟高雄に拾われ、子どものいない鄂が

養子として育て、天保と名づける。天保は勉学に励み、十六歳で科挙を受験するため上京する。秦百万は十年間も国保の消息がないため、国正を遣って国保を捜させる。国正は五霸山で鄂に殺され、百万は帰らぬ二子を思って病死し、黄四秀も夫国正を思って病死する。秦家は三度も火災に遭い、康氏は夫と嫁の霊を祭る。天保は鄂から与えられた馬で上京する途中、秦家荘で康氏に遭遇し、国保と顔が似ていたことから康氏を養祖母として拝し、家宝の藍羅衫を贈られる。天保は状元に及第して真宗の女婿となり、八府巡按の官職を授かって金印を帯び、養祖母と拝した康氏を伴って、十八年前に国保が向かった南京へ赴任する。天保が告示を貼って庶民に訴えを出させると、一日で三百六十余件の訴状が届く。それはすべて五霸山の山賊を訴えるものばかりであった。天保は信じず怒って休廷するが、高雄から実情を聞き、白羅衫と血書を見、万里爽や秀英の訴状を見て、鄂を裁く。離散した秦家は円満に再会し、父子はともに八府巡按を務める。

この物語は『警世通言』『蘇州府羅衫再合』に由来している。家族の結びつきの強さを描いた作品であり、家族を核とする伝統的な儒教社会を重視する案証である。一般に善書の案証では悪人に神罰が下ることになっているが、いまの案証ではすでにそれはない。

2. 中国民間文化遺産としての漢川善書の保護について

i、伝承者の早期発現

漢川市、仙桃市ともに現在善書を上演する芸人はほとんど50代以上であり、漢川市城関区西門橋の徐忠徳（70才）グループは熊紹軒（62才）、聶海子（58才）、黄春桃（55才）、祁敏新（49才）、馬口鎮電影院袁大昌（77才）グループは許国平（59才）、王愛知（56才）、何早娥（46才）、王慧芳（46才）、仙桃市老城区夕陽紅鍾立炎グループは尹業謨（68才）、杜子甫（77才）、王宗発（70才）となっている。若いメンバーを育成し、この伝統説唱の上演活動が続く継承するように努める必要がある。

ii、テキスト収集と整理

①漢川市文化館が収蔵している善書の脚本テキストは100部ぐらいあり、その中には芸人の自作作品、各地からの収蔵作品を含んでいる。漢川市文化館が収蔵するテキストには、以下のような作品がある。

『食妻失銀』、『天理良心』、『五子争父』、『火烧百花台』、『恩義亭』、『人頭願』、『双層縁』、『孝

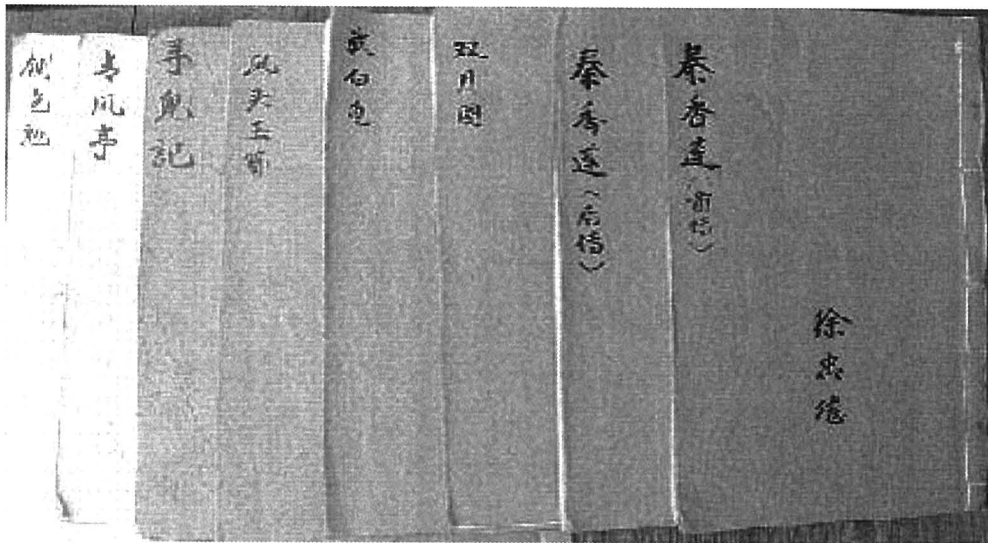
遇奇縁』、『茶碗記』、『双珠球』、『美人瓶』、『棲鳳山』、『珍珠塔』、『双槐樹』、『三姓一子』、『梅花記』、『描容尋夫』、『捨命救夫』、『双毛辮』、『審磨子』、『双勝記』、『翰林洞』、『湘鄉情』、『七首案』、『珊瑚配』、『漁網媒』、『蜜蜂計』、『九件衣』、『磨坊産子』、『趕春桃』、『白公鷄』、『争死受封』、『長寿橋』、『四害誤』、『五通橋』、『破肚顯貞』、『双状元』、『天賜金馬』、『打棕衣』、『蝴蝶盃』、『仮神化逆』、『五子哭墳』、『打蘆花』、『吉祥花』、『三娘教子』、『哭長城』、『鳳凰図』、『啞巴告状』、『万花村』、『双英配』、『双婚配』、『剛子案』、『万尤村』、『狸猫換太子』、『龍須面』、『双官誥』、『双鳥做媒』、『金石縁』、『逃生救父』、『浪子回頭』、『三槐冤』、『血羅衫』、『過後知』、『好姑娘』、『鴛鴦鏡』、『捨命伸冤』、『桂花橋』、『童媳化嫂』、『六月雪』、『一口血』、『孝婦受累』、『捨子救主』、『芙蓉屏』、『善惡分明』、『販馬記』、『紅蘿卜頂』、『八義図』、『血袍記』、『装瘋延婚』。

この中には宣講本来の趣旨である伝統道徳を説く案証が多く、『宣講集要』などの案証集に収められた作品も含まれている。



漢川市文化館が収蔵する善書のテキスト [阿部泰記撮影]

②西門橋の徐忠徳氏は『秦香蓮』、『鋼包勉』、『青風亭』、『尋児記』、『鳳頭玉簪』、『放白亀』、『双月図』、『売子奉親』、『李三娘』、『劉子英打虎』、『童媳化嫂』、『六月雪』 などをはじめとして膨大な作品を創作している。



除忠徳氏所蔵善書の一部分 [阿部泰記撮影]

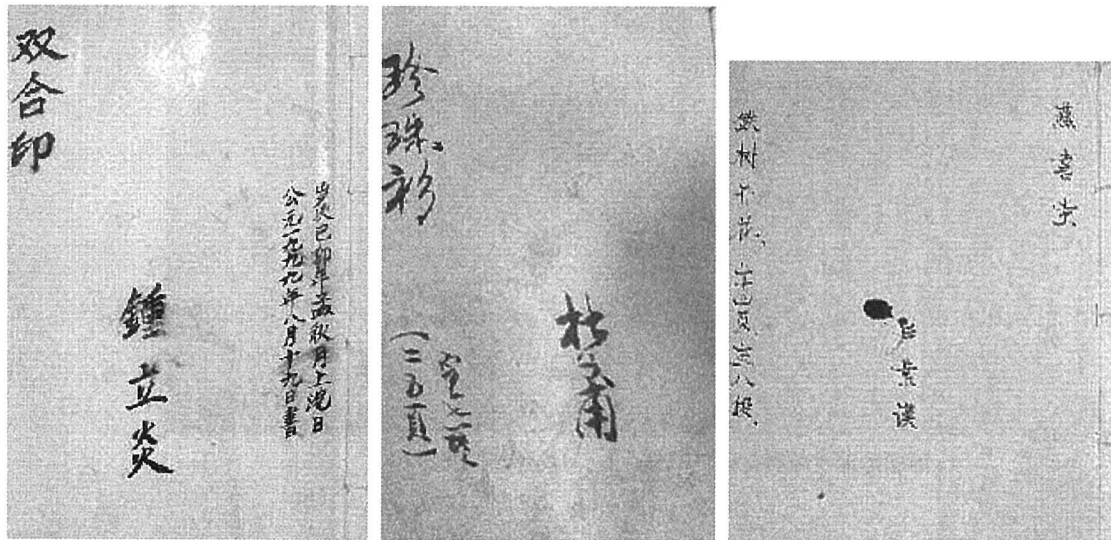
③馬口鎮の袁大昌氏は『粉粧楼』、『楊家将』、『董小宛伝奇』、『天宝図』、『地宝図』、『三縁記』、『梁祝姻縁』、『秦雪梅』、『車棚産子』、『唐李旦』、『双婚配』、『再生縁』などの長篇物語を善書に改編している。また、自作の『打碗記』、『万花村』、『薛平貴回窰』、『陳三両爬堂』、『状元尋母』の善書テキストが、彼の弟子許国平氏によって上演されている。また、袁氏の師匠である何文甫氏の作品『王華買夫』、『義侠傳』(上、下)、『大審煙槍』も今なお上演されている。



小説を改編した袁大昌氏の善書 [阿部泰記撮影]

④仙桃市の鍾立炎氏は『父子双合印』、『蘇州訪賢』や、湖北の地方劇である漢劇を改編した作品『四郎探母』、『緑花河斬子』、『棚雲陽』、『哭祖廟』、尹業謨氏は『鉄樹開花』、杜子甫氏は『望江楼』、『法堂換子』、『珍珠衫』、『断臂姻縁』、『珊瑚宝珠』、『三子争父』など自作テキストを保存して

いる。



鍾立炎・杜子甫・尹業謨氏の創作善書

〔阿部泰記撮影〕

また仙桃市民間芸人協会会長の李洪源氏からは案証集『勸善録』巻四を見せていただいた。そして天門市に居住する兄が善書を蔵しているという情報も得た。『宣講集要』に類する案証集であるが、巻頭を欠くため刊行年は不明である。

三 結尾

現在漢川で行われる善書は従来性格とは違って、観衆のニーズに応じて宗教性を希薄にし、娯楽性を強調して、ほかの曲芸と同じように演芸館で定期的に行われる経営型に変容している。

上演される物語は親孝行など伝統的な話が多く、方言と素朴な言葉を多く使用しており、地方の高齢者の大きな娯楽となっている。また入場料も安く、観客にとって最も経済的な娯楽とも言える。

ただ、近年重視されることが少なくなり、民間の善書芸人も高齢化してきており、政府（文化庁、文聯、曲芸家協会）指導のもと、民間芸人の早期発見と伝承者の育成、メディアの支援（ホームページ、テレビ、ラジオ）が必要とされる。もしこの状況に放置されたままであれば、この全国ではここしか現存しない貴重な伝統説唱文学が消滅する可能性もある。

本稿では、高齢者の娯楽文芸としてなおも存続する漢川善書の活動現状を報告し、中国民間文化遺産として保護を期待するものである。

なお、筆者は後に2005年1月4日に孝感市南孝区（原孝感市）において善書活動の有無を調査したが、この地域では善書はすでに絶滅し、漢川市とおなじく書館が2カ所経営されていたが、

そこでは善書は講じられず、「鼓書」が講じられていた。また善書を講じたことがあるという周家坑村55号の老人李仁高氏を訪問したところ、現在は農耕に専念しており、善書はまったく上演していないという回答であった。

【参考文献】

- 1) 酒井忠夫、『増補・中国善書の研究』（東京）、国書刊行会、1999年2月
- 2) 阿部泰記、「宣講における歌唱表現—二重の「案証」効果」、『アジアの歴史と文化』（山口）、2004年3月
阿部泰記、「宣講の伝統とその変容」、『アジアの歴史と文化』（山口）、2003年3月
阿部泰記、「『躋春台』—「宣講」スタイルの公案小説集」、『笠征教授華甲記念論文集』（台北）、台湾学生書局、2001年12月
- 3) 馮驥才、『中国民間文化遺産搶救工程・守望民間』（中国）、西苑出版社、2002年8月
- 4) 『中国曲芸音楽集成・湖北卷』（中国）、新華出版社、1992年
- 5) 『中国曲芸志・湖北卷』（中国）、文化芸術出版社、1993年
- 6) 陳霞、『道教勸善書研究』（中国）、巴蜀出版社、1999年
- 7) 陳兆南、『宣講及其唱本研究』（台湾）、中国文化大学博士論文、1992年
- 8) 游子安、『勸化金箴・清代善書研究』（中国）、天津人民出版社、1999年
- 9) 劉守華、『口頭文学与民間文化』（中国）、中国文聯出版社、1989年2月
- 10) 李惠芳、『中国民間文学』（中国）、武漢大学出版社、1999年8月
- 11) 吳文科、『中国曲芸通論』（中国）、山西教育出版社、2002年8月
- 12) 李孝悌、『清末の下層社会啓蒙運動1901—1911』（台湾）、中央研究院近代史研究所專刊67、1992年5月